

「教育」と「EDUCATION」との出会い

— 16~19世紀の外国語辞書の変遷より —

「だから、異言を語る者は、それを解釈できるように祈りなさい」

(コリントの信徒への手紙14-13)

“Therefore, he who speaks in a tongue should pray for the power to interpret.”

(1 CORINTHIANS 14-13)

村 瀬 勉

田 中 萬 年

1. はじめに

教育のさまざまな問題については、誰もが、どこの国もが同じように悩み、その悩みを解消しようと試みてきた。しかし、答えを見いだせないでいる。本質的に永遠に解くことのできない問題なのであろうか。教育については一人ひとりがそれぞれの経験に基づいた論をもち、人間の数だけ教育論があり、さらに言語が異質であれば、行き違い食い違いが生じ、問題は複雑多様化し対立が続く。このような状況から抜け出するためには、少なくともコミュニケーションの手段である言葉、言語の、それぞれの背景を理解し合い、幅広い同意を求めて対話を目指すことが必要であろう。

日本語の「教育」と英語の「Education」には基本的に考え方の違いがあり、それが日本文化と西欧文化との大きな違いとなっていると言われている。

漢語の漢字は古いものは既に1世紀頃から、日本に渡来し、ポルトガル語、オランダ語、日本の開国以前に英語も僅かであるが渡来した。しかし、米使 Perry が来航し、オランダ語の代わりに英語が大きな影響を与え始めた。すなわち、「教育」は「Education」と出会った。このように諸外国文化が日本の文化に大きな影響を与えたのである。この点に関して永嶋(1970)は、次のように述べている。

4世紀後半における漢字の伝来と、16世紀に始まる西欧言語との接触は、日本語の歴史にとって文字どおり画期的な事件である。ところで、異質言語との接触は、日本語のみならず日本文化全般にも深甚な影響をおよぼした。言語が単なる思想伝達的手段にとどまらず、文化の中核と密接に結びついた存在である以上、このことは必然的運命である。

Education と関わる日本語の「教育」だけではない。事実、漢字や西欧語との接触の歴史上さまざまな

ニュアンスを持ったいくつもの言葉が Education に関する翻訳語として当てられてきた。それらの日本語は、外国語、したがってまた外国文化とのさまざまな出会いの条件と、わが国における「教育」的営みの様々な事実や考え方を担っているはずである。本論文は、こうした Education をめぐる文明の出会いとわが国における消化を研究するための前提として、Education に関わるさまざまな日本語翻訳語の中から「教育」という語が殆ど唯一の言葉として残るに至った経過を辞書の編纂史を中心に跡づける作業である。

それは、いわば「教育」と「Education」の出会いの「時」を知ることである。この「時」を知ることとは、中国文明と西欧文化、あるいは、中国文明と米国文明との日本における出会いが日本において消化していく原点を知ることになるであろう。同時にまた、日中米の「文明の衝突」(Huntington 1996、1999)ではなく、「対話」(山内 2000)への出発点を築くことになるであろう。

ギリシャ語では「時」を表す言葉に二つある。その一つはクロノス(χρονος)で「物理的な時間」をいい、もう一つはカイロス(καιρος)で人生の大きな転機となる、また深い感動をや感銘をうけて周辺の時間とは切り離れて強く印象に残るような、「神の時機」といえる時である(早川 1991)。本論文は、「EDUCATION」と「教育」の出会いの「カイロス」研究の基礎となることを願い、その「クロノス」を知ろうとするものである。

2. 「EDUCATION」と「教育」の語源と意味

まず、2つの語の語源と意味を比較してみよう。

a) 「EDUCATION」の語源

例えば、『ランダム英和大辞典』(1981)によれば、「educate」、「education」は、ラテン語に始まり、

educate <êducât(us) brought up, taught (ptp. of êducâre) = ê-E-+duc-lead+âtus-ATE, education < L êducâtiôn (s. of êducâtiô) = êducât (us) (→EDUCATE) +- iôn- -IONとある。

また、「educate」「education」、それぞれの意味を一般の英英辞書でみると、educateは、1: to provide schooling for 2: to develop mentally and morally especially by formal instructionであり、educationは、1: the act or process of educating: training through study or instruction: SCHOOLING 2: knowledge, skill, and development gained from study or training 3: the study or science of the methods and problems of teaching (WEBSTER 1972)とある。

日本語の一般辞書における「教育」と、英英辞書における「Education」の大きな違いは、「Educate」「Education」には「develop」「development」の語があることである。「develop」の意味は①③として「① to unfold gradually or in detail: set forth by degrees. ③ to bring out the possibilities of」(①だんだんとまたは詳しく表明する: しだいに公にする。③～の可能性を引き出す。)とあるが、②に「to apply chemicals to exposed photographic material (as a film) in order to bring out the picture (②映像を現わすために(フィルムなどの)露光された写真材料に化学薬品を作用させる(現像する)(佐久間 治1998)」があることを考えると、教育の望ましい過程を物語る語である。

b) 「教育」

「教育」の「教」は、古代文字で、左の偏の上部は千木を、下部は子供を表し、偏全体で屋上に千木のある建物で子供が学んでいる様子を表す。旁は、教権の鞭を示している。また、「育」の古代文字の上部は生子の倒形で、生まれるときのさま。月(肉)は限定符的に加えたものか、或いは肉を供して養育の意を示したものであろう(白川 静 1996)。

これらの二語、「教」と「育」が「教育」として用いられるようになったのは、孟子(前372-前289)と、その弟子が編纂したといわれる「孟子」の「尽心章句上」に「君子に三つの楽あり、～天下の英才を得て之を教育するは、三の楽なり。～」とあるのが初出とされている(岩波文庫 下1972、日本国語辞典 1976)。

俵木(1990)は、四書五経における用例を用いて「教」の意考を検討し、為政者が民を統治することの一環として「教」えるのに使用されていることを見い

だし、第一義的にいわゆる教育の公的側面を意味する場合は「教」を、私的側面を意味する場合は「誨(音読みではカイ、訓読みではオシ・エル)」が用いられていると帰納した。また「育」の意考を同じように検討して、まず「育」がきわめて希にしか使用されていないこと(論語に「育」はない)、ついで文脈中で果たしている役割を検討して、例えば、前述のように「育」は胎児の出産時の形象化に起源をもつといわれているが、生まれおちた子の成人する過程への意図的介入は希薄で「養」のような代替可能語をもつことができ、固有の意味を決定できないと指摘している。

さらに、「教」と「育」を結びつける孟子の意図が、たんにこの二つの文字の意味の和であるか、または「教育」という成語としてそれだけでなくはならない固有の概念の存在を示すものかを検討した。その結果、上の「尽心章句」における「君子有三楽」の君子は「王」を意味して、ここでの「教育」は「育才」の一変型であり、「教養」に置き換えても概念上区別され得ないと述べている。

このように見てくると、「Education」と孟子の「教育」という二つの異言語の共通性はないかのように思えるが、「尽心章句上」をさらに読み続けると、孟子は「教」の方法として五通りの形式があると言っている。すなわち、「君子の教うる所以の者五つ、時雨の之を化するが如き者あり。得を成さしむる者あり。財(才能)を達せしむる者あり。問いに答うる者あり。私かに淑艾せしむる者あり。此の五つの者は、君子の教うる所以なり」とある(『孟子』(1972)、『教育学辞典』(1936)「孟子」の項)。

この箇所では「教」だけで「教育」は使用されていない。しかし、これら五通り、特に第三は「本人の才能を十分に達成させる」ことであり、英語「Education」の意味であることを考えると、孟子の「教 + 育」の曖昧さを越えて、「Education」がもつ、理想とされる「教育」の本質を述べていると言ってよいであろう。

なお、「孟子」の小林勝人の訳において、「君子三楽」の君子は「くんし」とそのまま訳しているが、「君子之所以教者五」の君子には「すぐれたひと」とルビをつけて、為政者と読める前者の君子と違うことを強調している。これは「Education」を意識してのことであろうか。

「論語」と「千字文」伝来が3世紀ごろとすると「孟子」の伝来も3、4世紀頃であろうが、「孟子」はわが国体と相容れないとして忌避された。それが江戸時代(1603-1867)になって朱子学の流行とともに必読

の書となり、国語の中に消化されて一般に用いられるようになった。明治維新(1867～)以前の用例は、特に「教育」という語が担うべき(Education)固有の意味合いを、意識的に明らかにしようとはせず、単に「教」と「育」との意味の合成と一般に受けとられていたと見てよい(俵木 1990)。

このような一般的状況にもかかわらず、「徳川幕府の奨励によって学術の研究、特に儒学が盛んになり諸学派が出現し、孔孟の真義を明らかにすることに努めた古義学派の祖、伊藤仁斎(1627-1705)は、教育の目的は道の実践にあるとし、実行と個人尊重・自由主義の教育をし、「孟子」の「被教育者の長所を認めて、十分にこれを引き伸ばす」という考えは受け継がれていたのである(伊藤 1707)。

c) 「Education」 = 「教育」か

「Education」 = 「教育」ではない、という議論は多くある。例えば、福沢諭吉(1839)は、「学校は人に物を教うる所にあらず、ただ天質の発達を妨げずしてよくこれを発育するための具なり。教育の文字はなほだだ穏当ならず、よろしくこれを発育と称すべきなり」と述べている。この他に、開智(川上 1889)、誨育、教学、開発をもって「教育」とする考えもあった。

ここで「Education」 = 「教育」ではない、という「教育」とはどのよな「教育」をいっているのであろうか。最近の日本語辞書における「教育」を調べてみよう。

『日本国語大辞典』(1973)では、「知識を与え、個人の能力を伸ばすためのいとなみ。現代では、一定期間、計画的、組織的に行う学校教育を指す場合が多い。」と表現している。しかし、一般の辞書の表現は違う。例えば、『広辞苑』(第5版、1999)では、「教えること、人を教えて知能をつけること。人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動」となっており、田中(2000)は、『辞苑』(1935、博文館)、『広辞苑』(岩波書店)第1版(1955)から5版(1999)にわたって調べ、第二版以降が上と同じような表現であることを確かめた。

さらに、注目すべきは、資料1に示すように数多くの「辞典」あるいは「事典」における「教育」の定義の表現に「教育」と「Education」の部分的意味を用いているものの、孟子の「本人の才能を十分に達成させる」を無視するか、触れていても極めて希薄であることである。

このような状況にたいして、村瀬(1995)は、能力開発を「Education」と同義と主張し、田中(1999)、

Tanaka (2000)は、「“Education”は『教育』ではない」として『『教育』を世界に共通する“Education”観により再編すべきで、それは『職業能力開発』と理解すべき」と主張している。

しかし、これらの意見は、狭義の「教育」、あるいは明治からの、さらに現在の「教育」を念頭に置いての意見である。すなわち、最も一般的辞書である『広辞苑』の表現に代表される「教育」の説明に対する批判であり、個性を引き出す教育が言われている今日、『広辞苑』が顕わにそれを表現しないのは不思議なことである。顕わに表現すると同時に、「Education」と同じ、あるいは近い考えの「孟子の教育法」があったことを日本に紹介すべきである。

一方、現在の「教育」が抱える問題の解決のために多くの解決策が提案されている。特に職業能力開発の立場から、Tanaka, Evers (1999)は、「教育」と「Education」の統合としての「Ergonagy」の概念を提出しているし、小原(2001)は、「職業能力形成」の教育活動の特徴を「教育力」の面から分析し、教育としての独自の意義の手がかりを得ようとしていることは新鮮であり注目すべきことである。

3. 方法：この研究に関連した辞書および解説

この論文で採った方法は、「教育」と「Education」が出会ったであろう19世紀中頃を中心になるべく多くの辞書の発刊年を比較することから始まる。

森岡(1965)は、英和辞書における訳語の変遷の研究において、幕末から大正初期にかけての代表的な辞書を訳語上の特徴にもとづいて、第1期は1872年以前、第2期を1873-87年、第3期を1888-1911年、第4期を1912年以後と4期に分類している。本研究の対象は森岡の区分にしたがえば、第1期の1872年以前の辞書類であるが、森岡が用いた堀達之助の「英和対訳袖珍辞書」に始まる「和訳英辞書」、「薩摩辞書」のシリーズと Hepburn の「和英語林集成」に加え、1603年の「日葡辞書」以降の蘭仏、蘭和、英和、英華の辞書、および 1814年の「諸厄利亞語林大成」系統の辞書にも言及する。

なお、使用した辞書の主なものの原本の複写を資料2に示した。また、辞書とそれら辞書編纂の背景を知るために簡単な解説を論文後半に資料3として付した。参考にした著書は以下の通りである。すなわち、森岡(1965)、日本英学史学会「英語事始」(1976)、日本英学史刊行会(1982)、俵木(1990)、岡田(1991)、杉本(1996、1998-99)、永嶋(1996)、南出(1998)、

堀および遠藤 (1999)、および、それぞれの辞書、辞典、字典の翻刻版に付せられた改題、解説等である。

本論文はこれらの研究なくしては成り立たない。感謝と敬意を表するものである。なお、引用はなるべく明記するようにしたが錯綜を避けるため省略した場合があるのでご了解を頂きたい。

4. 外国語辞書の年譜

「教育」=「Education」となった19世紀中頃に重点をおいて、外国語辞書の略年譜(必要に応じて編者も)を表に示し、詳しい年譜と関連事項の年表(年表1984、図表世界史1997)は資料4に示した。

5. 年譜の分析と問題点

a) 分析

注目している16~19世紀を日本語と他の語との関係から以下の6つの時代に細分することができる。

① 日葡時代 1516年中国に、また1543年日本にポルトガル人が来航してから、1600年代初頭にオランダ人が日本との貿易を独占するまでのポルトガル時代である。この時代にイエズス会士 Luis Frois (1532-97) が1563年来日し、1549年以降の布教史「日本史」を執筆しているし、1577年来日した J. Rodriguez (1561-1634) は、「日本語小文典」(1620)などを刊行している。本論文の「日葡辞書」は1603年に刊行されたが「教育」とそれに対応したポルトガル語は見いだされない。なお、Frois (1585)の「われわれの間では普通鞭で打って息子を懲罰する。日本ではそういうことは滅多におこなわれない。ただ(言葉?)によって譴責するだけである」「子を育てるに当たって決して懲罰を加えず、言葉を以て戒め～」と日本の教育に注目して驚いていることは現在の日本の教育を比較すると興味深いことである。

② 日蘭時代 1810年「訳鍵」刊行までの時期で「教育」に対応するオランダ語がある。「蘭語の Opvoeden = 児ヲ教ユ」「蘭語の opwiegen = 児ヲ教育ス」の時代。

③ 日英蘭華時代 1811年「諸厄利亜興学小筈」から、1858年の「和蘭字彙」刊行までで英蘭が共存し、「英語の Education = 蘭語の Opvoeding = 日本語の 育アグル事」の時代。

④ 第1期日英華時代 1860-1862年の期間で、媒介としての蘭語が消え、漢語が関与してくるが、「英語の Education = 日本語の 養ヒ上ル」の時代。

⑤ 第2期日英華時代 1866年から1871年までの、

Lobscheid の英華字典が深く関与し、日本語では「教育」となり、「英語の Education = 日本語の 教育」になった時代。ただし、Hepburn の辞書では未だ「教育」と「Education」が一体的には定義づけられていない。

⑥ 日英時代 1872年以降の「教育」と「Education」が一体的に定義づけられる時代。

表と資料2、3をもう少し詳しく分析してみると、次のことが分かる。

① 1796年の「江戸ハルマ」には名詞の「教育」という語は、オランダ語にも日本語にもないが、動詞で、例えば opvoeding = 「児童ヲ教育スル」という語が使われている。1774年にオランダ語から「解体新書」を翻訳した杉田玄白が1815年に「蘭学事始」で「教育」の語を用いている。

② 1814年には、英蘭日辞書である「諸厄利亜語林大成」では、「to educate = opvoeden = 成育スル」となり3カ国の関係ができた。

③ 1830年の Medhurst の英和・和英語集では、「to educate = ヤシナフ、ヲシウ。ヤシナウ = to bring up」となっている。

④ 1843年の Picard の英蘭辞書と1855-58年の和蘭字彙より「educate = opvoeden = 養ヒアグル、および、education = opvoeding = 育アグル事」が成立する。

⑤ 1862年の英和對譯袖珍辭書では④が受け継がれ「educate = 養ヒ上ル、education = 養ヒ上ル」となっている。

⑥ ⑤の改正増補版(1866)以降はeducation = 教育となった。

⑦ ⑥に平行して(1866-69) Lobscheid の英華字典が刊行され、Educate = to bring up = 養育、教養、教育。また、Education に教育の語が見られる。

⑧ Hepburn の和英語林集成の初版では、和英部で KYO-KUN、教訓 = education, 英和部で EDUCATE = shitateru, kyoukun はあるが、Education はない。

⑨ ⑧和英語林集成再版以降は、教育 = EDUCATION となる。

表 本研究で使した辞書の系譜と関連事項 (資料4の簡略版)
(仮名遣い、送り仮名などは原文のままである)

時代区分	年代と辞書 (編者)	「教育」及び"Education"の関連事項	
日葡時代	1564 日葡葡日辞典		
	1603 日葡辞書	「教育」に関する語はない。	
日蘭時代	1728-33 蘭仏・仏蘭辞典 (Marin および Halma)	蘭語 <i>opvoeden, opvoeding</i> に 仏語 <i>éducation</i> の用例がある。 <i>Éducation</i> に <i>opvoeding</i> の用例がある。	
	1796 江戸ハルマ	「教育」はないが、 <i>koesteraar</i> =教育スル、 <i>opgewiegd</i> = 小児ノ教育シタ <i>opvoeding</i> = 児童ヲ教育スル、 <i>opwiegen</i> = 小児ヲ教育スル がある。	
	1810 譯鍵 (上の縮小版)	<i>opvoeden</i> 童ヲ教ユ、 <i>opwiegen</i> 児ヲ教育ス	
日英蘭華時代	1811 諳厄利亜興学小筈	Education 「教育」はなく、類語の <i>learn</i> 「習学」がある。	
	1813-33 長崎ハルマ	<i>opvoeden</i> 育アグル。 <i>opvoeding</i> 育アグル事	
	1814 諳厄利亜語林大成	<i>to educate, opvoeden, 成育スル</i>	
	1815-23 字典、五車韻府 (Morrison)	「教」 <i>teaching and learning, denotes education generally.</i> <i>EDUCATION</i> 教学。「教育」の語はない。	
	1830 英和和英語彙集. (Medhurst)	<i>To educate Yasi-naf, Oshi-oo</i> ヤシナフ オシウ <i>ヲシフ O-si-foo To educate. ヤシノウ Ya-sina-oo To nourish, to bring up</i>	
	1842-43 漢英字典 (Medhurst)	「教」は <i>to set an example, to induce, to imitate; instruction, a law a sect of religion,</i> 「育」は <i>to breed, to nourish.</i> 「教育」の語はなく、教訓 (<i>instruction</i>)、教学 (<i>to teach a school</i>) がある。	
	1843 英蘭辞書 (Picard)	<i>Educate-ed-ing = opvoeden. Education = opvoeding</i>	
	1855-58 和蘭字彙	<i>opvoeden</i> 養ヒアグル。 <i>opvoeden</i> 育アグル。 <i>opvoeding</i> 育アグル事又育カタ	
	1857 改正譯鍵	<i>opvoeden</i> 養上ル、育上ル、童ヲ教ル <i>opvoeding</i> 育ル事、育方	
	日英華時代 (I)	1860 増訂華英通語	教育に関する語なし。
1862 英和對譯袖珍辭書 開板		<i>Educate-ed-ing,</i> 養ヒ上ル。 <i>Education,</i> 養ヒ上ル丁。	(注)
日英華時代 (II)	1866-69	英華字典 (Lobscheid)	
	1866 改正増補 英和對譯袖珍辭書 初版	<i>Educate-ed-ing,</i> 教育スル <i>Education,</i> 全上ノ丁	(E の項は 1867 年版)
	1867 改正増補 英和對譯袖珍辭書 2 版		<i>Educate, to bring up, 養育、教養、教育、誦、to teach, 教、教訓、掌教、教導、教誨、教化、開化、開導、教習</i>
	1867 和英語林集成 初版 (Hepburn)	<i>KYO-KUN</i> キャウクン 教訓 <i>Instruction, teaching of the principles of morality and religion, education</i> <i>EDUCATE, shitateru. oshiyeru, shikommu, kiyokun szru: kyoju, shitateru</i> <i>EDUCATION</i> の項はない。	<i>Education, the bringing up, as of child. 養者、育者、instruction, 教者、教訓、教学、教之道、訓道、教法、子女之教訓、子之教育</i>
1869 改正増補和訳英辞書 通称 薩摩辞書	<i>Educate-ed-ing,</i> 教育スル <i>Education,</i> 全上ノ丁		
日英時代	1872 和英語林集成 再版 (Hepburn)	<i>KIYÔ-IKU, キャウイク, 教育, (oshiye sodateru), Instruction, education.</i> — <i>suru, to educate, to instruct and bring up.</i> <i>EDUCATE, t.v. Kiyôju suru, shi-tater, kyôkun suru, oshiyer, shi-kom, shi-tsukeru.</i> <i>EDUCATION, n. Kiyôju, kyôkun, shi-tate.</i>	

(注) 日英華時代は、上記の「Education = 養ヒ上ル丁」と下記の「= 教育ノ丁」の二つに分けられる。

b) 問題点

上の結果から、「教育 = Education」になった時期を探るために生じる疑問(太文字)と、それにたいする著者の考えは次の通りである。

① Marin と Halma の蘭仏・仏蘭辞典に、仏語 *Éducation* = 蘭語 *opvoeding* の用例があり、1796年の「江戸ハルマ」には、蘭語 *kaesteraar, opvoeding, opvoegen* = 「教育スル」と対応しているにも拘わらず、何故、「*Éducation*」= 「教育」とならなかったか。1862年の英和対訳袖珍辞書まで、なぜ「養ヒ上ル」が選ばれていたのであろうか。

堀の「英和対訳袖珍辞書」の Preface にあるように、「～ we received an order to prepare such a Dictionary as soon as possible～」と完成が急がれ、口語的「長崎ハルマ」の改訂版「和蘭字彙」にある「養ヒ上ル」を使用するのが都合がよかったことは、「和蘭字彙」への依存度が約70%であることから明らかである。

また、Doeff が「江戸ハルマ」を知らなかったはずがない(岡田 1991)ように、堀が「江戸ハルマ」「譯鍵」系統を知らなかったはずがないから「教育」の語を使用してもよいと思われるが、Doeff が「長崎ハルマ」の編纂に「江戸ハルマ」を利用した積極的証拠は全く見当たらない(永嶋 1970 p.68)、あるいは無視したように堀は「江戸ハルマ」系統の「教育」を採用しなかったのではなからうか。

それは、「江戸ハルマ」「長崎ハルマ」の項で述べたように、Doeff の辞書を編纂する考え方が口語的であることが、漢語である「教育」になじまなかったのであろう。「育アグル」「ヤシナフ」「ヨシフ」などは和語であり、口語的である。

また、Sapir (1912)が「一つの言語が、他の言語にもっとも単純な影響は、語の『借用』である。」「借用する側の言語自体が言語資料に対して示す心理的な態度が、その言語の外来語に対する受容性と深く関係しているということは、大いにありそうに思われる」と指摘していることを考えると、借用漢語である「教育」を避け、和語「ヨシフ、ヤシナフ」に執着し使用したのかも知れない。

②-1 何故、改正増補英和対訳袖珍辞書(1866)以降は「Education = 教育」となったか。

①の推論が正しいければ、初版の「Education = 養ヒ上ル」から改訂増補の「Education = 教育」になったのであろうか。

英和対訳袖珍辞書の「改正増補」の計画は初版発行

後間もなくあり、4年後の1866年と1867年になされているが、当時、箱館に赴任していた堀達之助に対しては一言の挨拶もなかったようである(堀・遠藤 1999 p.12)。堀越は堀の転出後、編集主任となっている。「改正増補」版の Preface には、初版にある堀の Preface に加え、堀越自身の改正増補版の Preface が英語で書かれている。

The first edition of this work, published in the second year of the Nengo Bunkiuw, being entirely sold out, I was ordered to revise and correct it for a second edition. ～

YEDO, January, 1866 HORIKOSI KAMENOSKAY

ここには、初版を correct し、revise するよう命じられたとのみあり、何を参考にしたかの記載はない。したがって「education = 養ヒ上ル」から「education = 教育」への変化について編者からの直接の証拠は今のところ見いだせなかった。勝俣銓吉郎(1914)は堀越亀之助に会い、「この再版の訂正者は堀越愛国翁で～。訂正に當られたのは翁が開成所の教官をせられて居た時で翁の直話に依ると改刻に入費を多く費(か)けたくないか餘り手を入れぬやうにとの註文で一頁に一二の割合で訂正を加へたださうである。～博物学に関する譯語の改正等に就いては～」と述べているが、本論文で問題にしている点についての指摘はない。推論の域を脱しないが、Lobscheidの英華字典(1866-69、Educationを含むEの項は1867年版)が大きく影響していると考えるのが妥当であろう。それは、堀・遠藤(1999 p.166-167)の次の記述からも確かであろう。

「ロプシャイトは、ペリーの結んだ日米和親条約の批准書交換のため、米国使節団アダムスの通訳として安政元年-2年(1854-55)に来日、下田で堀達之助と交渉していたが、その時、メドハーストの『英漢(華)』・『漢(華)英』字典を堀達之助に贈っていた(1855年2月4日)。」堀がそれを利用したことは考証されている。(遠藤 1996,1999)。

「それだけではない。次にロプシャイトが自分の『英華字典』を編集の際(1866-69)、今度は堀の『英和対訳袖珍辞書 初版』を利用したらしい。」(堀・遠藤 1999)そして、それはロプシャイトの字典の「養育」の語が「教育」の語に先行していることから分かる。しかし、なんと言っても、ロプシャイトの「英華字典」の英語単語にたいする訳は極めて詳しく、対抗できる辞書はなかったことが大きいと思われる。

「こうしてこれら四つの辞書<ピカートの『英蘭辞書』、メドハーストの『英漢字典』→堀達之助の『英

和對譯袖珍辭書』→ロプシャイトの『英華字典』は、[英蘭+英漢]→[英和對譯袖珍]→[英華]辞書という具合に、オランダ語だけでなく中国語を間にはさんで、当時の文化交流の最も基礎的な交点に位置していたわけである(堀・遠藤 1999)。

②-2 このように Lobscheid の影響が大きいとしても、「英華字典」の「Educate」には「養育」「教養」があり、ついで「教育」が出てくる。何故、「教育」が選ばれたのであろうか。

一旦、Lobscheid から選ぶと決まれば、「養育」「教養」「教育」などの語から何を選ぶのであろうか。意外と悩むことなく「教育」を選んだように思える。何故ならば、「教育」の語は、「孟子」以来、俵木(1990 p.33)が指摘するように、「日本において徳川吉宗の御勅書にも、広瀬淡窓の文にも見える。しかし、維新前の用例はとくに『教育』という語が担うべき固有の意味合を、意識的に明らかにしようとはしてこなかったようである。単に『教』と『育』との意味の合成と一般に受けとられていたと見てよいかも知れない」からである。

また、蘭学の衰退も「養育」「教養」のような蘭語になじんだ語を廃し、漢語の「教育」によって漢語化されたように思える。このことは「譯鍵」の解説にあるように漢語化の機会が常にうかがわれていたことから考えられることである。

なお、「Education = 養ヒ上ル」から「Education = 教育」への転換を取り上げて、川上(1990)は、「エデュケーションは才能を引き出すことで教育は教え育むこと」という理解の下に、一節を設け「エデュケーションを『教育』と誤訳した犯人は誰か」において、上記転換を誤訳として犯人は「改正増補英和對譯袖珍辭書(1866)」の編者堀越龜之助であるとしている。しかし、当時の「教育」は、川上が理解している「教育」とは必ずしも同義であるとは言えないし、孟子までさかのぼって「教育」の意味を考えれば堀越が誤訳をしたとは言えないであろう。

③ 何故、Hepburn の和英語林集成の初版は1867年出版であるが、「KYO-KUN = education, EDUCATE = shitateru, kyokun」であり、そして EDUCATION はないか。

初版の「PREFACE」によれば

The only works of the kind within his (Hepburn) reach were the small vocabulary of Dr. Medhurst published in Batavia in 1830; and the Japanese and Portuguese Dictionary published by the Jesuit missionaries in 1603.

とあるように、参考に出来たのは「日葡辞書(1603)」(ポルトガル語ゆえ Education はない。また、「教育」の語はない)と Medhurst の「英和和英語彙集(1830)」(To educate = ヤシナフ、ヲシウ) だけであり、これらから、「KYO-KUN = education, EDUCATE = shitateru, kyokun」が出てきたとは思われない。

また、His principal dependence, however, has been upon the living teacher, とあり、主に日本における生活の中で得た知識によっていると言っているし、～ A large number of the words are of Chinese origin, ～the fruit of nearly eight years of unremitting labor, さらに、～the fruit of nearly eight years of unremitting labor, ～とある。すなわち、中国語にかなり依存し、1860年当時からの労作であることを考えると、1855年に初めて来日して以来、1866-69年にかけて「英華字典」を出版するまでの時期に重なるものである。すなわち、Hepburn の Preface の「His (Hepburn の) principal dependence, however, has been upon the living teacher,」の中に Lobscheid が含まれる可能性はある。実際、Lobscheid の中に「Educate」と「Education」に対応して「教訓」があることもその可能性を裏付けるものであろう。しかし、「教育」もあるが採用されていない。

④ 何故、Hepburn の再版以後は、教育 = EDUCATION となったか。

② a, b と同様の理由によるものと思われる。

6. 結論

年譜の分析で述べたように、「英和對譯袖珍辭書」の「Education = 養ヒ上ル」から、「Education = 教育」への転換は、明治維新前年の1866年、改正増補で行われたと推論できる。この転換については惣郷(1974, 1986)が改正増補における「訳語の変化の一部」をあげているが、本研究のような辞書刊行の時系列による推論には触れていない。

この転換については、当時 Lobscheid が刊行し始めた「英華字典」が大きな影響を与えていると思われるが、その影響がどのようなものであったかは、それらの辞書の「Preface」を見る限り不明であり手がかりがない。その解決は、「教育」と「Education」のカイロスとしての出会いの問題と共に、著者に残された今後の問題である。

7. 本研究に残された課題

本研究によって「教育」と「Education」との出会い

いの「クロノス」を明らかにすることが出来た。しかし、次のような点が課題として残されている。

第一に、「出会い」の「クロノス」の解明は出来たが、例えば戦後の『広辞苑』でさえ、本文中で紹介したように「発育すること」が削除されるなど理解しがたい変化を考えると、本論文で立ち入らなかつた「出会い」の背後にある社会的、政治的状況を明らかにする必要がある。

第二に、「教育」については、「孟子」、「論語」などを用いて検討したが、「Education」の定義については語源のみを扱い、その意味の変遷については検討していない。例えば「WEBSTER」の辞書において、その定義に「to develop」が定着するのは1890年版からのようである。よく言われる「Education」に「能力を開発する」という意味が当初からあったということは断言できないのである。それは、日本の教育と対比させて、当時のヨーロッパの教育は鞭で強制していたと Frois が言っていたことから分かるように、モニトリアル・システムによる「暗記主義」的方法であったことを見れば分かる。そのような「Education」に「to develop」がはいってくるという概念の変化は、社会的変化、特に Darwin (1809-82) の「進化論」(1859) の容認と係わる可能性があると思われる。このような歴史的研究により補強されなければならない面もある。これらの課題については今後検討していきたい。

謝辞 この論文のため文献収集にご協力くださった職業能力開発総合大学校、学習院大学、拓殖大学、鶴見大学、帝京大学、東京大学、九州大学の各大学図書館、資料館、および静岡県、鹿児島県の県立図書館、中津市福沢論吉資料館の職員の方々に感謝申し上げます。

なお、本研究における誤謬、粗漏の点について教育、言語の研究者、および博雅の士のご叱正を仰ぐことができれば望外の喜びである。

参考にした辞書類

『教育学辞典』、岩波書店、1936年。この辞典は1983年に復刻版が刊行された。「孟子」の項は内野台嶺(東京文理科大学教授)が執筆している。1936年、すなわち、昭和11年当時に「孟子の教育」を引用し、解説していることは注目すべきことである。なお、資料1に引用した辞書類の出典をここでは省略した。

“WEBSTER'S ESSENTIAL ENGLISH DICTIONARY WITH THE DEFINITIONS IN ENGLISH AND IN JAPANESE TRANSLATION”, BRITANNICA JAPAN,

INC. FIRST EDITION, 1972.

『日本国語大辞典』小学館 1973年。

『ランダムハウス英和大辞典』小学館 1981年。

『大辞林』三省堂 1988年。

『字通』白川静 平凡社 1996年。

『近代日本総年表』第二版 岩波書店 1984年。

『ビジュアルワイド図説世界史』東京書籍 1997年。

『広辞苑』第5版 岩波書店 1998年。

原典に関する解説資料

「孟子」(前320年頃)。ここで用いた注釈本は、小林勝人訳注、岩波文庫(下)(1972)で引用箇所はの原文、訳および英訳は次の通りである。

① p.340. 尽心章句上、「孟子曰、君子有三樂、而王天下不與存焉、父母俱存、兄弟無故、一樂也、仰不愧於天、俯不?於人、二樂也、得天下英才而教育之、三樂也、君子有三樂、而王天下不與存焉、」

孟子がいわれた。「君子には三つの楽しみがある。しかし天下の王者として君臨することは、この中には入っていない。父も母もそろって健在で、兄弟姉妹みあ無事で息災なのが、第一の楽しみである。仰いでは天に対して恥ずかしいことがなく、俯しては何人に対しても後ろめたいことがないのが、第二の楽しみである。天下の秀才を門人として教育し、これを立派な人物に育てあげることが、第三の楽しみである。君子には三つの楽しみがある。しかし天下の王者となることは、そのなかに入っていない。」

英訳:『Mencius』translated with an introduction by D.C. LAU, Penguin Books (1970) p. 185.

Mencius said, A gentleman delights in three things, and being ruler over the Empire is not amongst them. His parents are alive and his brothers are well. This is the first delight. Above, he is not ashamed to face Heaven; below, he is not ashamed to face man. This is the second delight. He has the good fortune of having the most talented pupils in the Empire. This is the third delight. A gentleman delights in three things and being ruler over the Empire is not amongst them.'

原典にある「教育」を日本語訳ではそのまま用いているが、英訳では「Education」を用いていない。

② p.373. 尽心章句上、「孟子曰、君子之所以教者五、有如時雨化之者、有成德者、有達財者、有答問者、有私淑艾者、此五者、君子之所以教也。」

孟子がいわれた。「君子が人を教育する方法は五つ

通りある。すなわち第一は、ほどよく降る雨が自然に草木を養育するようなやり方である。第二は、本人の徳性を完成させるというやり方。第三は、本人の才能を十分に達成させるというやり方。第四は、ただ単に質問に対して答えるだけというやり方。第五は、間接に教えを受けて自分で修養させるというやり方である。この五つのやり方は君子がそれぞれ本人の個性に応じて、人を教育する方法なのである。」

英訳 同上 p. 191. Mencius said, 'A gentleman teaches in five ways. The first is by a transforming influence like that of timely rain. The second is by helping the student to realize his virtue to the full. The third is by helping him to develop his talent. The fourth is by answering his questions. And the fifth is by setting an example others not in contact with him can emulate. These five are the ways in which a gentleman teaches.'

原典の「教」は日本語訳では「教育」、英訳では「teach」となっている。

なお、C. Muller が新訳を下記URLで提供している。
<http://www.human.toyogakuen-u.ac.jp/~acmuller/contao/mencius.htm> ただし、本論文で引用した「三楽」の部分は未訳。また、「五教」第三の訳は、Those whose abilities he uncovers. である。

Luis Frois TRATADO EM QUE SE CONTEM MUITO SUSINTAE ABREVIADAMENTE ALGUMAS CONTRADIÇÕES E DIFERENÇAS DE CUSTUMES ANTRE A GENTE DE EUROPA E ESTA PROVINCIA DE JAPÃO (1585)、(ルイス・フロイス「ヨーロッパ文化と日本文化」岡田章雄訳注、岩波文庫(1991) p.61。

J. Rodriguez ARTE BREVE DA LINGOA IAPOA (1620)、(ロドリゲス「日本語小文典」池上岑夫訳 岩波文庫 (1993)。)

伊藤仁斎は、例えば次のように述べている。

『童子問』(1707) (問答体で自分の思想を述べたもの) 卷之上第十二章に「孟子雖道性善。不徒論其理。必曰擴充。必曰存養。」とある。清水(1966)の校注によれば、「孟子は性善を道ふと雖も、徒に其の理を論ぜず、必ずと擴充と曰ひ、必ず存養と曰ふ。」

擴充の注：本来のものをひろめみす。「孟子」公孫丑上篇に「凡そ我に四端有る者は、皆括めて之を充たすことを知れば、火の始めて然(も)え、泉の始めて達するが若くならん」とあり、仁斎の学問修養を重んずる説の根本をなすものである。「四端」とは仁・義・礼・智の道に進むいとぐち。

存養の注：本来のものがへらないよう保存し、養育する。「孟子」尽心上篇に「其の心を存し、其の性を養ふは、天に事ふるゆえなり」とある。

文 献

杉田玄白『蘭学事始(1815)』岩波文庫(1959) p.19。
福沢諭吉「文明教育論(1889)」、慶応義塾編纂『福沢諭吉全集』第12巻、岩波書店(1970)再版P.220。
または山住正己編、『福沢諭吉教育論集』、岩波文庫(1991) p.133。

福沢諭吉「福翁自伝(1898-99)」。『時事新報』に連載、多くの新訂版がある。例えば、富田正文注解による慶応通信版(1957)、岩波文庫版(1978)。

勝俣銓吉郎「最初の英和對譯字書」『英語青年』Vol. XXXII. No. 2, (1914) p.56。

清水 茂『童子問』校注 日本古典文学大系97『近世思想家文集』岩波書店(1966)。

Edward Sapir LANGUAGE: An introduction of study of speech (1921) エドワード・サピア「言語—ことばの研究序説—安藤貞雄訳、岩波文庫(1998)。

森岡健二郎「近代語の成立」『明治期語彙編』明治書院(1969)。

永嶋大典『蘭和・英和辞書發達史』講談社(1970)。
『新版蘭和・英和辞書發達史』ゆまに書房(講談社版の復刻版(1996)。

尾形裕康『新版日本教育通史』早稲田大学出版部(1971)。

惣郷正明「『英和对訳袖珍辞書』考」『英学史研究』第7号(1974) p.163。

杉本つとむ『和蘭字彙』<解説> 早稲田大学出版部 第V分冊(1974)。

日本英学史学会『英語事始』エンサイクロペディアブリタニカ(ジャパン)インコーポレーテッド(1976)。

日本英学史史料刊行会編『長崎原本〔諸厄利亞興学小筈〕〔諸厄利亞語林大成〕研究と解説』日本英学史史料刊行会(1982)。

惣郷正明『日本人の語学力史』② Communication コミュニケーション 日本電信電話株式会社広報部編集(1986) No. 02 p.22。

川上正光『日本に大学らしい大学はあるか』共立出版(1989) p.11-14。

川上正光『日本に先生らしい先生はいるのか』閣文社(1990) p.8-9。

俵木浩太郎『孔子と教育』みすず書房(1990)。

岡田袈裟男『『ドウフ・ハルマ』における口語的翻訳

の意味』『江戸の翻訳空間—蘭語・唐話語彙の表出機構—五』笠間書院 (1991)。

早川宗八郎「校長就任にあたって—この時とこれからの時を覚えて—」『職業訓練大学校三十年史』(1991)。

村瀬勉『EDUCATION』私考』『I.V.T.ジャーナル』Vol. 5、No. 24、(1992)、p.3。

平田論治『官定英訳教育勅語における翻訳の思想』『英学史研究』第26号(1993)p.59 (官定英訳以外の訳についても言及している。)

遠藤智夫『英和対訳袖珍辞書』とメドハースト『英華字典』—抽象語の訳語比較— A~H』『英学史研究』第29号(1996) p.47。

杉本つとむ『西洋文化事始め』スリーエーネットワーク (1996)。

杉本つとむ『杉本つとむ著作選集』(特に、第7巻『辞書・字典の研究Ⅱ』第8巻『日本英語の文化史の研究』) 八坂書房(1998-99)。

南出康世『英語の辞書と辞書学』大修館書店(1998)。

佐久間治『英語に強くなる多義語200』ちくま新書(1998) p.83-85。

遠藤智夫『英和対訳袖珍辞書』とメドハースト『英漢字典』—抽象語の訳語比較— I~Z (完結編)』『英学史研究』第32号(1999) p.39 (静岡県立中央図書館英文蔵 Medhurst の漢英字典に書かれている堀達之助への Lobscheid の献辞の解説と試訳がある。)

堀孝彦・遠藤智夫『英和対訳英和対訳袖珍辞書の遍歴』辞游社 (1999) p.167。

Samuel P. Huntington, The clash of civilizations and the remaking of world order (1996)、Simon & Schuster. (鈴木主税訳『文明の衝突』集英社(1998)。

Kazutoshi Tanaka and Michael Evers, "ERGONAGY: A new concept in the integration of KYO-IKU and EDUCATION", Presented 14 April, 1999, OISE, University of Toronto, Toronto, Canada at the annual Comparative and International Society (CIES) Conference.

Kazutoshi Tanaka, Controversy between Vocational Training and Education in Japan, 2000, The Polytechnic University of Japan, Faculty of Human Resources Development Text Book Series No. 2, pp. 1-43.

田中萬年「"Education"は『教育』ではない」『技能と技術』(1999.11)。

サミュエル・ハンチントン・鈴木主税訳『文明の衝突と21世紀の日本』集英社新書 (2000)。東京における Samuel P. Huntingtonの講演 "Japan's choice in the 21st century" (1998.12) の訳。

山内昌之『文明の衝突から対話へ』岩波現代文庫 (2000)。

田中萬年『職業指導・産業教育論—日本における教育と職業との関連の課題—』静岡大学集中講義用資料集 (2000)。

小原哲郎「職業訓練の教育力の特徴」『職業能力開発総合大学校紀要』第30号—B (2001.3) pp. 49-57。

資料1 教育学辞典、百科事典等における「教育」の定義

辞書名等	定 義	辞書名等	定 義
岩波書店 『教育学辞典』 (1936)	教育は語源から暗示されるごとく「斯くある」状態から「斯くなるべからざる」状態へと引き上げる作用であり、存在より当為へ導き上げる働きである。	TBSブリタニカ 『ブリタニカ国際大百科事典』(1973年、1993改訂)	教え育てること。知識、技術などを教え授けること。人を導いて善良な人間とすること。人間に内在する素質、能力を發展させ、これを助長する作用。人間を望ましい姿に変化させ、価値を実現させる活動。
平凡社 『教育学辞典』 (1955)	教育は人間社会にもともとそなわっている基本的な機能のひとつであって、価値を実現するために他人に意図をもってはたらきかけ、これをのぞましい姿に変化させる活動をいう。	第一法規出版 『教育学事典』 (1978)	『教育』というはたらきの発生の根拠に注目して、『子ども (あるいは若い世代) を善くしようとするはたらきかけ』という定義をしておきたい。
小学館 『大日本百科事典』(1968)	教育は、人間に対する愛から出発して、対象とする人間に働きを及ぼし、これを価値ある姿に成長させようとする社会機能である。	平凡社 『大百科事典』 (1984)	教育とは、広義ではこれらの人間形成全体を指すが、狭義では一定の目的ないし志向のもとに、対象に対する働きかけを指す。
平凡社 『世界大百科事典』(1972)	教育とは人間がほんらい内に有しているものを<引き出す>こと、<育てあげる>ことであるといわれている。	第一法規出版 『新教育学大辞典』(1990)	(定義としての解説はない。)

資料2 閲覧した辞書における関連部分の複写（＜拡大＞以外は原寸）

（本論文の複写は「教育」「EDUCATION」関係語の確認を目的としているので、多くは復刻版を利用したものである。原著そのものの印刷不良もあって複写が判然としない場合があるが関係語に注目して頂きたい。）

Qeôxa . Voxiyuru meno . i , Xixö . Mestre que ensina, dá cuifos, &c .

1603 日葡辞書
(原本) <拡大>

Qeôxa . ケウシャ (教者) **Voxiyuru mono.**(教ゆる者) すなわち, **Xixö.**(師匠) 教授し, 忠告を与えなどする師.

(訳本) <拡大>

Opvoeding. z. v. Bezorging van onderhoud. Entretien, nourriture.

*** Opvoeding. Opbrenging. Education.**

1729 蘭仏辞書
Halma
<拡大>

Hy is van eene braave opvoedinge. Il a eu une bonne éducation, il a été bien élevé.

De opvoeding doet veel tot de kinderen. L'éducation est un grand point pour la jeunesse, la bonne éducation est de très grande conséquence aux enfans.

OPVOEDEN. v. a. Groot maaken, opbrengen, onderwyzen. Elever, nourrir, instruire. Daar moet tyd en zorg zyn om de kinderen wel op te voeden. Il faut du temps & du soin pour bien élever les enfans, pour donner une bonne éducation aux enfans. De OPVOEDING, optrekking der kinderen vereischt al de aandagt en bekwaamheid der gaauwste Meesters L'éducation des enfans demande toute l'attention & la capacité des plus habiles Maîtres. Een kind zonder opvoeding is zyn Ouders schande en straf. Un enfant sans éducation est la honte & la punition de ses Pere & Mere.

1730 蘭仏辞書
Marin
<拡大>

koesteraar. z. m.	スル 教育
een kind koesteren.	スル 小児育
opvoeden. w. w.	養フ
opvoeden.	育ル
* opvoeding.	スル 教育 児童

1796 江戸ハルマ

OPVaaren. 上行
 ... oeden. 教育 育養
 二.フ

1810 訳鍵

1814 譜厄利語林大成 草稿

1813-33 長崎ハルマ

Handwritten notes and signatures, including 'Education' and '成育'.

guten	被 ^レ 親父 ^ヲ 親 ^ク 養 ^フ
van allen heeft hem opgevoed	ト ^ク ト ^ク
opvoeden opleiden	育 ^ス ト ^ス
opvoeding	
afne. kinderen in deugd	彼 ^レ 不 ^レ 徳 ^ノ 行 ^ハ 教 ^ム ト ^ス
den opvoeden	養 ^フ ト ^ス
het is de opvoed. het land	彼 ^レ 田 ^ノ 金 ^ノ 川 ^ノ 育 ^ス ト ^ス 養 ^フ
de di bairen opvoed was	以 ^テ 養 ^フ ト ^ス ト ^ス
opvoeden m. slachten	子 ^ヲ 養 ^フ 親 ^ヲ 殺 ^ス
opvoeding opvoeding	相 ^レ 育 ^フ ト ^ス 相 ^レ 殺 ^ス ト ^ス
af is dan een goede opvoeding	彼 ^レ ト ^ク ト ^ク 育 ^ス ト ^ス 育 ^ス ト ^ス
de opvoeding doet het	十 ^ニ 養 ^フ ト ^ス 育 ^ス ト ^ス
het de kinderen	養 ^フ ト ^ス ト ^ス

Keaou-heō 教 | teaching and learning, denotes education generally. 1815-22 字典

五車韻府

EDUCATION; 教學, keaou heō, teaching and learning.

Morrison

To educate Yarsinaf, O-sifoo 育^スト^ス 養^フト^ス

育^スト^ス O-sifoo To educate

育^スト^ス O-siyur' To teach, instruct, train

育^スト^ス Yarsina-oo To nourish, to bring up

育^スト^ス Yarsinakf' To feed, maintain, rear

1830 英和和英語彙集

Medhurst

教 Keaou, to instruct, to teach, to set an example, to induce to imitate; instruction, a law, a sect of religion. 教訓 keaou heun, instruction. 教令 keaou ling, instructions, commands. 設教 she keaou, to establish instruction. 五教 woó keaou, the five precepts; regarding the human relations. 教民 keaou min, to teach the people. 領教 ling keaou, to receive instructions. 教門 keaou min,

a sect, a school of philosophy. 三教 san keaou, the three sects. 教化 keaou hwá, to reform by instruction. 教學 keaou heō, to teach a school. 教師 keaou sze, an instructor. 請教 tsing keaou, I solicit your instructions.

1842-43 漢(華)英字典

Medhurst

Educate - ed - ing, opvoeden.
Education, s. opvoeding, f.
Educator, s. opvoeder, m.

1843 英蘭辞書

Picard

<拡大>

<i>opbringen. opvoeden, groot maken.</i>	育上ル
<i>Kinderen opbringen.</i>	子ヲ育上ル
<i>Yong getogelte opbringen.</i>	鳥ノ子ヲ育上ル
<i>De spys opbringen of op tafel brengen.</i>	食物ヲ奉ル
<i>opbringen. l. g. opbringing.</i>	育上ル
<i>Het opbringen der kinderen.</i>	子供ノ育上ル
<i>opbringing. l. g. opbringen. l. g.</i>	
<i>opvoeden. n. n. onbeschoed qien.</i>	養ヒ上ル
<i>Zijn groot vader heeft hem opvoed.</i>	彼祖父彼ヲ育上ル
<i>opvoeden, optreken, opteengen.</i>	育アグ
<i>Zijne kinderen in deugd opvoeden.</i>	彼子供ノ行儀ヲ育上ル
<i>Het is of hij op het land bij de boeren opvoed was.</i>	彼田舎ニテ育上ル
<i>opvoeder. s. m. soedsterker.</i>	子供ヲ育アグ人
<i>*opvoeding. opvoeding.</i>	育アグ事
<i>Hij is van eenz barre opvoeding.</i>	彼人ノ育アグラシク
<i>De opvoeding doet veel tot de kinderen.</i>	子供ノ育上ルニ事多シ

1855-58 和蘭字彙

Educate, to bring up, 養育 'yéung yuk, Yáng yuh, 教養 káu' 'yéung. Kiáu yáng, 教育 káu' yuk, Kiáu yuh, 誦 yuk, Yuh; to teach, 教 káu'. Kiáu, 教訓 káu' fan'. Kiáu hiun, 掌教 'chéung káu'. Cháng kiáu, 教導 káu' tò'. Kiáu táu, 教誨 káu' fú'. Kiáu hwui, 教化 káu' fá'. Kiáu hwá, 開化 hoi fá'. K'ái hwá, 開導 hoi tò'. K'ái táu, 教習 káu' tsáp. Kiáu sih.

1866-69 英華字典
Lobscheid

英和对訳袖珍辞書
1862 開板

Educate-ed-ing, v. a. 養上ル
Education, s. 養上ル

1866, 1867 改正増補

Educate-ed-ing, v. a. 教育ス
Education, s. 教育

Educating, instructing, 教養 káu' 'yéung. Kiáu yáng, 教育 káu' yuk, Kiáu yuh, 養育 'yéung yuk, Yáng yuh.

Education, the bringing up, as of a child, 養者 'yéung 'ché. Yáng ché, 育者 yuk, 'ché. Yuh ché; instruction, 教者 káu' 'ché. Kiáu ché, 教訓 káu' fan'. Kiáu hiun, 教學 káu' hok, Kiáu hiob; the course of education, 教之道 káu' chí tò'. Kiáu chí táu, 訓道 fan' tò'. Hiun táu; discipline, 教法 káu' fá, Kiáu fá; the education of children, 子女之教訓 'tsai 'nü chí káu' fan', 子女之教育 'tsz 'nü chí káu' yuk, Tsz nü chí kiáu yuh.

1869 和訳英辞書

Educate-ed-ing, v. 教育ス
Education, s. 教育

1872 開拓使版

Ed'ü-eñte, v. a. -ed 教育ス
-ing.
Ed'ü-eñ'tion, s. 教育

資料3 本研究で使用した参考辞書と関係項目の解説

(注：著者未見を除き、閲覧した辞書の所在を明らかにするため図書館名を付した。)

1603 日葡辞書

VOCABULARIO DA LINGUA DE IAPAM com a declaração em Portugues (ポルトガル語を付した日本語の語彙集)：長崎版日葡辞書(日本イエズス会、1603. 補遺 1604、語彙数約 32,300 語) 16 世紀後半に九州に来日したイエズス会の神父と修道士たちが編纂。本論文の表および資料 4 における日本語の引用は、土井忠生、森田 武、長南 実編訳の岩波書店(1980.5)発行によった。Hepburn は、この辞書を日本最初の和英辞典「和英語林集成」の編集に用いた。

鶴見大学図書館、学習院大学資料館

1728 仏蘭辞典

DICTIONNAIRE COMPLET FRANCOIS ET HOLLANDOIS : P. Marin

Halma の仏蘭および蘭仏辞書と共に「江戸ハルマ」の編纂に貢献した。 鶴見大学図書館

1729 蘭仏辞典

WOORDENBOEK DER NEDERDUITSCH EN FRANSCHE TAALEN : FRANÇOIS HALMA

François Halma (1653-1722) はオランダ、ユトレヒトの書肆・出版業者。この初版、再版が「江戸ハルマ」と「長崎ハルマ」の底本となっている。

東京大学附属図書館

1730 蘭仏辞典

GROOT NEDERDUITSCH EN FRANSCHE WOORDENBOEK : P. Marin 鶴見大学図書館

1733 仏蘭辞典

LE GRAND DICTIONNAIRE FRANCOIS & FLAMAND : François Halma 鶴見大学図書館

1796 波留麻和解

F : HALMA, NEDERDUITS WOORDENBOEK (通称 江戸ハルマ)：稲村三伯 (1759-1811)、石井庄助等編、語彙数約 8 万、例文なし、訳文は一語一語に漢字片仮名まじり、30 部出版。在日オランダ人から手に入れたと思われる Halma の蘭仏辞書をもとにして約 3 年を費やして編纂されたものである。

「江戸ハルマ」は、江戸の学問的蘭学の性格を反映して漢字語が多く、後述の「長崎ハルマ」は海外貿易の中心地長崎の実用的性格を反映して口語的である。また、「江戸ハルマ」は江戸の蘭学者たちの知識をかき集めて、訳語を記入していったが、フランス語を解していたはずの Doeff の教導の下に編纂

された「長崎ハルマ」は、原辞典の例文までも訳出し、「江戸ハルマ」をはるかに凌いでいる。

東京大学附属図書館

1805-06 「江戸ハルマ」の増補版：中井厚沢

はじめ京都版と呼ばれたが、今は泉州版または関西版と呼ばれる。

1810 譯鍵：藤林普山 (泰助)

正式の名称は「Nederduitsche TAAL. 譯鍵」である。

凡例によれば、「八萬ヲ三萬ニ省略シテ」とあるように乾、坤、付録三冊構成の「江戸ハルマ」(発行部数 30 部)の縮小版である。単に単語を抜粋したものではなく単語、訳語の選択に配慮して改編し、発行部数も 100 部で多くの蘭学者に愛用された。しかし、訳語に漢語化がみられ辞書編纂の批判がある(岡田 1991)。

鶴見大学図書館

1811 諸厄利亚興学小筈：本木正栄(1767-1822)編

扉には「諸厄利亚国語和解」とある。全 10 巻 3 冊。「諸厄利亚(アングリア)」は England、または Anglia に対する語である。

Phaeton 号事件によって英語の必要性を知った徳川幕府は和蘭通詞本木正栄らに英学の学習を命じた。彼らは英語に通じていたオランダ商館員 J.C. Blomhoff から英語の手ほどきを受けた。「興学小筈」は、正栄の父、栄之進秘蔵の蘭英本(W. Sewel 1760)が底本と推測されている。内容的には英和シーソラスである。

拓殖大学図書館

1813-33 道富波留麻(ゾーフ・ハルマ、道記法馬、通称 長崎ハルマ)：Hendrik Doeff (1777-1835)と数人の長崎通詞と協力して編纂した蘭和辞典。

公的書名は、Hollandsch en Japansch Woordenboek、「和蘭辞書和解」、語彙数約万、多くの訳文を例示、訳文は漢語平仮名まじり。Halma の蘭仏辞書(原書)の第 2 版(1729)が底本。「江戸ハルマ」に対して、長崎では、1808 年の 2 月ごろから、^{かびたん}甲比丹(商館長) Hendrik Doeff (来日は 1799 年、19 年間滞日)の指導で、本木正栄、榎林高美、吉雄永保らがフランス語を学んでおり、Doeff も「江戸ハルマ」の底本と同じ Halma の蘭仏辞書を基に、和蘭通詞の協力をえて 1811 年ごろ、初稿をいちおう完成した。浄書が完全に終わったのは 1833 年である。長崎において、蘭・仏語学研究がある程度まで組織だった水準に達していたこと、これを前提条件として英語研究がスタ

ートした。福沢諭吉の「福翁自伝」(1898-99)に「蘭学社会の宝書として使用した」という記載がある。

この辞書がなぜ口語的かは、岡田(1991)が、それが当時のヨーロッパにおける一般認識で、底本「Halmaの仏蘭・蘭仏辞書」の構成が口語的であり、「江戸ハルマ」と無関係ではないと述べている。

鶴見大学図書館

1814 諸厄利亜語林大成：本木正栄他編

英蘭和三か国語の対訳辞書。草稿本と浄書本があり、草稿本の蘭語が浄書本にはない。先の「興学小筈」が完成した年に諸厄利亜国語字引仕立方の命が下り、3年後に完成された。英語、オランダ語の順に横書きされ、ついで日本語が縦書きされている。Sewelの辞書が底本となっている。

拓殖大学図書館

1815-23 字典

A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE, IN THREE PARTS: VOL. I - PART I R. Morrison

漢語を英語で説明した字典。

Morrison(1782-1834)は英国人宣教師。1807年に中国に入る。来日はしなかった。

鶴見大学図書館

1819-22 五車韻府

A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE, THREE PARTS: PART II - VOL. I R. Morrison

漢語を英語で説明している。Morrisonの辞書は幕末蘭学者の座右の書であった。

鶴見大学図書館

1830 英和和英語彙集

AN ENGLISH AND JAPANESE AND Japanese and English VOCABULARY. COMPILED FROM NATIVE WORKS, BY W. H. Medhurst. BATAVIA: Printed by Lithography. 1830

英国生まれの Medhurst(1796-1857)は、上記の Morrison について宣教師として東洋に来た。日本伝道を志していたが、機会もなく、Bataviaの東インド会社所蔵の日本語文献をたよりに編纂したもので、その Preface に、「～ the author has never been in Japan, and has never had an opportunity of conversing with the natives: but having through the kindness of several gentlemen from Japan, obtained the sight of some native books, particularly in the Japanese and Chinese character combined～」とある。

東京大学付属図書館

1842-43 漢(華)英字典

(漢名については遠藤(1999)参照)

Chinese and English Dictionary : W. H. Medhurst

1842, 1843年に Vol. 1, 2 がそれぞれ刊行された。

Perry が結んだ日米和親条約批准書交換の米国使節 Adams の通訳として、Lobscheid が 1854 年に来日、下田で堀達之助と交渉したとき、Medhurst の「漢英」「英漢」字典を堀に贈った。

鶴見大学図書館

1843 英蘭辞書 再版

A NEW POCKET DICTIONARY OF THE ENGLISH AND DUTCH LANGUAGES : H. Picard

堀達之助の「英和對譯袖珍辞書」は、底本として、この辞書を従に、再版(1857)を主にし、英蘭の部のオランダ語を削って「譯鍵」「和蘭字彙」等の和訳を移し入れてできあがったといわれる。

東京大学付属図書館

1847-48 英漢(華)字典

English and Chinese Dictionary : W. H. Medhurst

1855-58 和蘭字彙(ゾーフ・ハルマの改訂版)

桂川甫周等によって「長崎ハルマ」を改訂、書名も「和蘭字彙」と改めた。初編は 1855 年、全編が完了したのは 1858 年である。江戸時代の最高の対訳辞典であり、その後の英和辞典や他の外国語との対訳辞典、特に下記の「英和對譯袖珍辞書」に大きな影響をあたえた。杉本の解説がある(1974)。

東京大学付属図書館、鶴見大学図書館

1857 改正増補譯鍵：広田憲寛

「和蘭字彙」を参考にし「譯鍵」を増補改訂した。

静岡県立図書館葵文庫

1860 増訂華英通語：福沢諭吉

福沢は、幕府使節団に随行した際、San Francisco で清の商人仲夏から譲り受けた子卿原著「華英通語」が底本。英単語を 48 類に分類し、枠ごとに筆記体で単語を挙げ、その上に片仮名で、下に音注を示し、右側に中国語訳と片仮名で和訳を示した。この部分が「増訂」部分である。

中津市福沢諭吉資料館

1862 英和對譯袖珍辞書(文久二年江戸開板)

A POCKET DICTIONARY OF THE ENGLISH AND JAPANESE LANGUAGE : 堀達之助他

わが国における最初の、そして「辞書」とよべる英和辞典であり、この系統の辞書の研究が杉本(1998-99)によってなされている。Picard の初版、再版などが底本、訳語は長崎ハルマと和蘭字彙に大きく依存している。ごく少数ではあるが、「改正増補譯鍵」だけからとられた語がある(森岡 1969, p.54)。

帝京大学図書館

1866-69 英華字典

ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY, WITH THE PUNTI AND MANDARIN PRONUNCIATION :

REV. W. LOBSCHIED (1822-1893)

4部からなり、1866年版には、第1部の序とA-C、1867年版には、第2部D-H、1868年版には、第3部I-Q、1869年版には第4部、R-Zが記載されている。序では、中国民族とその歴史を概説し、さらにその言語について論じ、～中国における辞書の中で当時として最も完備していた点からいっても、また、日本で蘭学から英学中心に移ろうとしていた時期からいっても、日本に入り、日本の文化に大きな影響を与えた(森岡 1969, p.59-61)。 帝京大学図書館

1866 改正増補英和對譯袖珍辭書(慶應二年江戸再版) A POCKET DICTIONARY OF THE ENGLISH AND JAPANESE LANGUAGE (SECOND AND REVISED EDITION) : 堀越龜之助

堀達之助(1862)の改正増訂版の初版である。ここでこの論文の著者たちが指摘したいのは、堀達之助の1862年刊行「英和對譯袖珍辭書」における「Educate = 養ヒ上ル、Education = 養ヒ上ル事」が、この1866年の改正増補によって「教育スル、同上ノ事」となったことである。この版のPrefaceには堀の辞書のPrefaceが併記されているが、何故変えたかの直接的理由は不明である。九州大学図書館

1867 改正増補英和對譯袖珍辭書 : 堀越龜之助

上記の改正増訂版の2版で「教育」に関する部分に変化は見られない。 鹿児島県立図書館

1867 和英語林集成初版

A JAPANESE AND ENGLISH DICTIONARY; WITH AN ENGLISH AND JAPANESE INDEX; OR, JAPANESE EQUIVALENTS FOR THE MOST COMMON ENGLISH WORDS. J.C. Hepburn

訳語は日本人のものと違って特色がある。1867年に上海の美華書院で印刷された。 帝京大学図書館

1869 和訳英辞書(改正増補和訳英辞書第3版、通称「薩摩辞書」)

AN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY, TOGETHER, WITH A TABLE OF IRREGULAR VERBS, AND A LIST OF ENGLISH SIGNS AND ABBREVIATIONS. THIRD EDITION REVISED :

高橋新吉他

第3版となっているのは、堀のを初版、堀越のを第2版としているからである。海外留学を熱望していた薩摩藩の洋学生は、Hepburnが上海で印刷した「和英語林集成」のみごとさを見て、「英和對譯袖珍辭書」を同じ印刷所で印刷し、利益を得て留学しようとした。辞書の名前を変え、序に「～堀越先生

其謬誤ヲ改メ畧語加へ～ヨロシクハナリタレト～猶アカヌ所アルヲ以テ～アメリカ教師等ニ倚リ更ニ改メ正シ～且口調ヲ誤ランカ為吾片仮名ヲホトリニ属ケ～」とあるように、英語の見だし語に片仮名で発音をつけ、漢字にルビをつけた。 鹿児島県立図書館

1871 大正増補 和訳英辞林 「薩摩辞書2版」

AN ENGLISH-JAPANESE PRONOUNCING DICTIONARY, FOURTH EDITION REVISED

薩摩学生、前田正毅、高橋良昭に、英国派遣団の通訳、堀孝之(堀達之助の子息)の新知見を加えた。書名にあるように発音を特記している。発音は従来の片仮名ではなく Webster 式発音記号の先鞭をつけた。第4版となっているのは堀達之助の辞書から数えての版数であるが、「薩摩辞書」の増補再版で1873-87間に4回復刻版が刊行されている。

1872 和英語林集成再版

A JAPANESE-ENGLISH AND ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY : J. C. Hepburn

再版以後「教育」の語があり、日英・英日辞書のすべてにおいて、「教育」=「education」となった。

東京大学附属図書館

1872 英和對譯辭書(開拓使版)

ENGLISH AND JAPANESE DICTIONARY

開拓使仮学校(のちの札幌農学校)の生徒用に刊行された。1871年の薩摩辞書を木版で写し取っているが、末巻に化学用語約1000を加えてある。

静岡県立図書館葵文庫

1873 附音挿図英和字彙

AN ENGLISH AND JAPANESE DICTIONARY, EXPLANATION, PRONOUNCING, AND ETYMOLOGICAL, CONTAINING ALL ENGLISH WORDS IN PRESENT USE, WITH AN APPENDIX. :

柴田昌吉、子安峻 J. Ogilvie(1797-1867)の「Comprehensive English Dictionary」(1863)を底本としているが、Lobscheid 英単語の発音を Webster 式発音記号を表記した。挿し絵入りの英和辞書はわが国では初めてのもの。 静岡県立図書館葵文庫

1874 広益英倭辞典 : 大屋愷故 その他編

堀越の改正増補英和對譯袖珍辭書をもとに Webster 辞書、英国の Nuttal 英語辞書を参照し編纂された。

1886 改正増補和英英和語林集成

A JAPANESE-ENGLISH AND ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY : J. C. Hepburn

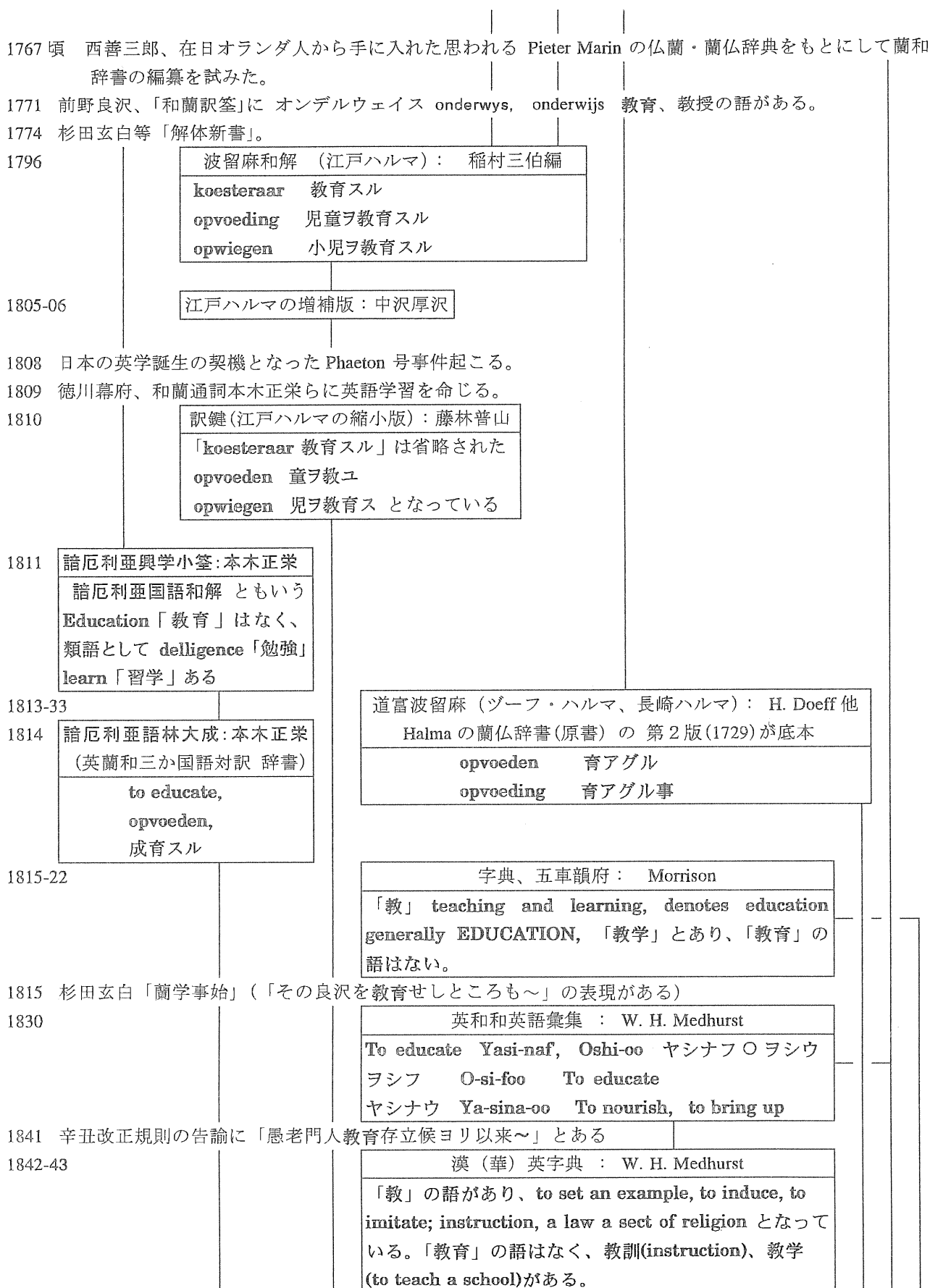
ローマ字表現が変わり、語数は増えた。

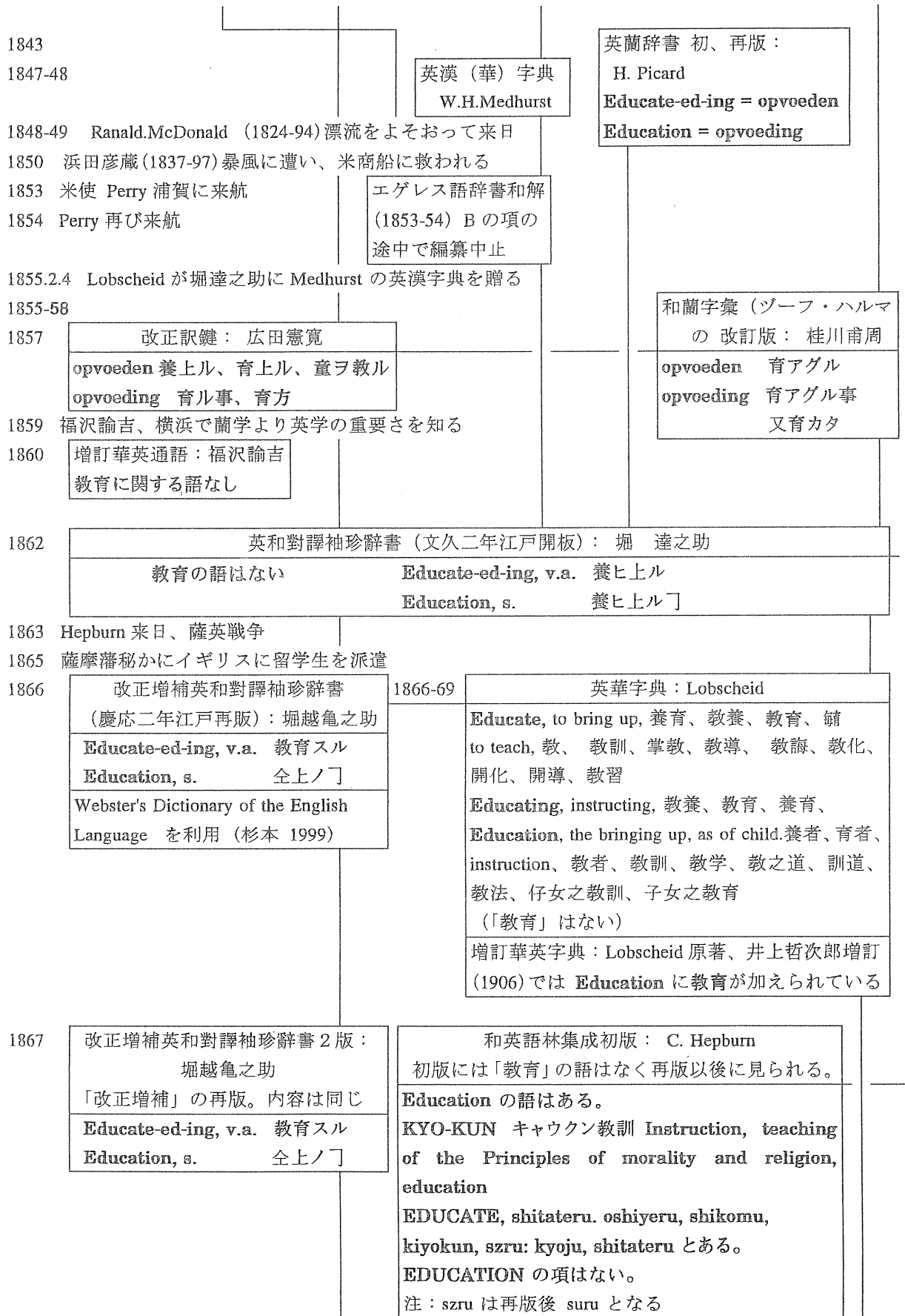
帝京大学図書館

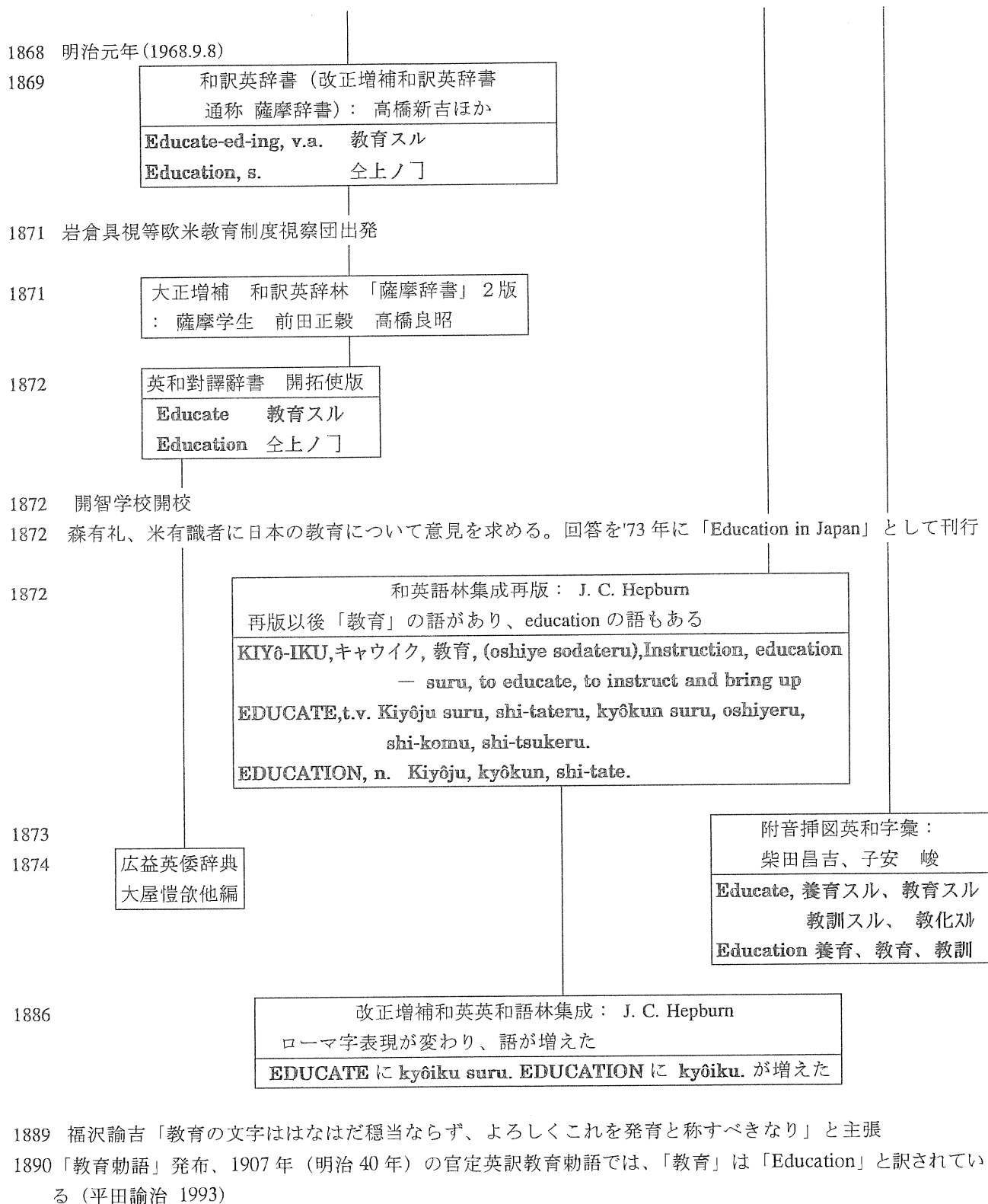
資料4 本研究で使用した辞書の系譜と関連事項

辞書は枠で囲まれている。実線は改正、増補を含み、辞書の編纂者が参考にした関係を示す。

西暦	事 項
1516	ポルトガル人中国に来る
1543	種ヶ島に漂着したポルトガル船によって鉄砲が伝来。西欧諸国で初めに日本と密接な関係を持ったのはポルトガルである
1549	F. Xavier 来日
1564	日葡葡日辞典：I. Fernandez 肥前度島で編集
1579	少年使節をローマへ派遣
1587	織田信長の伴天連追放令
1595	羅葡日対訳辞典：Latino - Lustianicum ac Iaponicum 天草で編集
1600	オランダ船 Liefde 号が豊後の臼杵湾に漂着、航海長 William Adams (三浦按針) は、徳川家康に謁見、外交顧問となった
1603	日葡辞書：イエズス会 「教育」という語はない。関連語では次の語がある 「教者 Qeôxa ケウシャ oxiyuru mono 教ゆる者」「教事 Qeôji ケウジ Voxiyuru,coto 教ゆる、事」 「Voxiye, uru, eta ヲシへ、ユル、エタ 教へ、ゆる、へた」
1609	平戸にオランダ商館開設
1613	英国、平戸に商館設置
1616	徳川秀忠によるキリシタン禁止令
1623	英国が商館を閉鎖、日本より退去
1632	羅西日辞典 ローマで刊
1637-38	島原の乱、鎖国時代に入った
1639	ポルトガル船の来航禁止
1641	平戸の商館を出島に移すオランダは、日本の開国(1855)までの200年間以上貿易を独占
1728	仏蘭辞書：P. Marin Éducation に opvoeding の用例あり
1729	蘭仏辞書：François Halma opvoeden, opvoeding に éducation の用例あり
1730	蘭仏辞書：P. Marin opvoeden, opvoeding に éducation の用例あり
1733	仏蘭辞書：François Halma Éducation に opvoeding の用例あり
1760	Korto wegwizer toto de Engelsche taal. Amsterdam, J.Wessing Wz. 1760. 12 W. Sewel (1653 ~ 1720)
	英蘭蘭英対訳会話集







The Encounter Between “Kyo-Iku” and “Education” in Japan
— The Chronological Study of the Dictionaries between 16th and 19th Centuries —

Tsutomu Murase and Kazutoshi Tanaka

The English word “Education” is generally considered a synonym or exact translation for the Japanese word “Kyo-iku.” However, the etymology and concepts of these words reveal a significant difference that impacts each country in its own peculiar way. “Education” came from Europe, through the United States, to Japan while “Kyo-iku” was imported from China. The two had their most critical and controversial encounter in Japan. This paper focuses on a study of the chronology of these words and the concepts, and also presents the results of their having collided in Japan.

In Tatsunosuke Hori’s “A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language (sic)” published in 1862, “Education” = “Yashinai-Ageru-koto” which means “to bring up” in English, and in Kamenoskay (sic) Horikoshi’s dictionary with the same title revised and corrected in 1866, “Education = Kyo-iku.” So far, therefore, we have seen that “Education” encountered “Kyo-iku” in 1866. We cannot find, however, on what grounds Horikoshi revised the Japanese definition from “Yashinai- Ageru-koto” to “Kyo-iku.” We can find that “Education = Kyo-iku (in Chinese) in Lobscheid’s “English and Chinese Dictionary” published in 1866-69. The two dictionaries, Horikoshi’s and Lobscheid’s, therefore, may have affected each other at that time.